在日コリアンによるミニFM局

――誕生とその地域的基盤――

町　村　敬　志

1　クニに穴を穿つ――エスニック・メディアの小さな「一撃」をたどる

移住や越境を経験することにより，それまでの言語的・文化的足場を失った異邦人は，日々を生き抜く知恵を蓄え，自らの生活に新しい意味を付与するために，新しい情報環境を生活世界の重要な一部として構築する。移住・越境を経験した人びとが，共通する言語や文化的背景を基盤に，マイノリティとなった移住先において制作したり流布したりするメディアを，とりあえずエスニック・メディアと呼んでおこう。

1990年代，筆者は日本国内とアメリカ・ロサンゼルスで，エスニック・メディアの編集者・発行者を対象とするインタビュー調査を集中的におこなった。そうしたメディアのとりうる形とその類型，時間・世代とともに変化する移住者とメディアの関係，メディア自体が埋め込まれたローカル・ナショナル・グローバルな文脈とそれらがもたらす機会と制約の構造などについて，断片的だが成果も発表した（町村 1993；1994；1997；1999）。

それから約30年が過ぎた。現時点から振り返ると，調査が実施された1990年代とは次のような特徴をもつ時期であったことがわかる。第一に，東西冷戦の終結とグローバリゼーションの到来が，国際的な移住・移動の新しい波を世界的な規模で引き起こしつつあった。日本もその例外でなく，日本を含め各地でエスニック・メディアが叢生する状況が生まれていた。第二に，インターネットは登場済みとはいえ利用はまだ限定されており，印刷出版や放送はメディアの中心をまだ占めていた。見方を変えると，1990年代とはその後のメディア激変直前の時期に当たっていた。第三に，日本の場合，バブル経済終焉から長い停滞に向かう転換の時期であった。外国籍住民・外国人住民は不況や差別，入管政策などさまざまな壁に出会う一方，世代を重ねながら独自の生活空間を日本のなかで築き始めていた。その先頭には在日韓国・朝鮮人がいた。以下では，事例とするFMサランでの呼称にしたがい「在日コリアン」をおもに使用するが，文脈に応じてふさわしい呼称も使用する。

1990年代のエスニック・メディアについて，「グローバルな規模で展開する移動者の流れと情報メディアのネットワーク化が作り出す，異なる時間空間の多様な接合の形態（町村，1997：124）」という性格をもつと筆者はかつて指摘した。メディアを取り巻く状況はその後

激変し，接合の形態は劇的に多様性を増した。エスニック・メディアも例外ではない。

しかし変化は一朝一夕で起こるわけではない。一人ひとりが，変化する自身の状況や外部条件に応じながら，自らの情報環境を再定義し，自分の声と他人の声が響き合う圏域を形成し直していく。そうした過程の積み重ねとしてのみメディアは変化していく。

エスニック・メディアは大きな力をもつわけではない。ジャーナリズムと言うにはしばしば通俗的で商業的，そして雑多だった。娯楽・実益中心で堅い話を避ける一方で，ときに政治的でナショナリスティックだったりもする。そして，たいていはごく小規模で短命だった。しかしそれでもなお，移住者やそれに続く世代が生み出すエスニック・メディアは，それまで一様に見えていた国（クニ）の存在に穴を穿つ存在であった。

1990年代に叢生したエスニック・メディアはその後，どのような道をたどったのか。再び調査を開始した。小規模なメディアはたいていの場合，制作に関わる個人の生活史と深く関わっている。携わる個人にとってエスニック・メディアは大切な拠り所になっていた。しかしそれはゴールというより，しばしば通過点に過ぎなかった。それゆえ，中断は意外なことではなかった。さまざまな人生がそこから展開する。だが，人びとのその後を追いかけていくと，エスニック・メディアに関わった経験は何らかの刻印を残しているようにも見えた。

エスニック・メディアの担い手は，どのようにメディア形成へたどり着いたのか。その後，どのような人生行路を歩んでいったのか。人びとにはどのような刻印が残されていったのか。そして小さなメディアがもたらした一撃は硬い岩盤にどのような穴を穿いていったのか。

以下本稿では，1990年代の大阪で，おもに在日コリアンによって運営されていたミニFM「FMサラン」の試みについて論じていく。用いる資料は1992・1995年と2023・2024年に実施した関係者へのインタビュー，そこで収集された文書等である。

2 「FMサラン」誕生に至るまで

2–1 キリスト教系施設・組織がつなぐネットワーク

「FMサラン」は，1992年12月，大阪市生野区に開局したミニFMである。『在日コリアン辞典』（明石書店，2010年）にも掲載されているように，それは在日コリアン史のひとつのエポックとして位置づけられてきた。だがラジオという性格上その足跡は後世に残りにくかった。

開局に向けた相談が始まったのは，1992年の初めであった。「ミニFM　サラムステーション815（パリロ）開局準備会　1992.2.22　KCCにて」と題されたメモには，次のような方針が記載されていた[1)]。

1. 在日韓国・朝鮮人が多数居住する生野区に在日コリアのメディアとして開局する。

2. 在日コリアを中心としたエンターテイメント・アミュージング情報そして法律相談，行政情報を提供する。
3. 地域活動団体の情報センターとしての機能も持つ。
4. 毎年行われる生野区民クリスマス，生野民族祭のインフォメーションを行う。
5. 来日韓国人への韓国語放送と在日と来日コリアの情報交換を行う。
6. 運営費用は月刊番組案内（サラム・ステーション）の広告やカンパで集める。
7. 運営スタッフ（予定）（略）
8. 放送編成

   24時間放送を目指し，音楽中心の編成とする。

   当面は時限放送で始める。（著作権については別に研究し，弁護士に相談する。）
9. 放送発信及び中継局は当初3カ所（KCC，聖和，創愛）
10. 開局予定：10月17日（土）12：00 pm

「生野民族祭10周年記念放送特集」[2)]

大阪市生野区の在日コリアンが新しいメディアの主体であった。企画に携わった中心メンバーは在日コリアンの2世であり，新しい放送は生野区という地域に深く根づくものと位置づけられていた。それを象徴するように開局時の予定企画は，「生野民族祭10周年記念放送特集」であった。

生野民族祭（正確には「生野民族文化祭」）は，1983年，生野区の公立小学校の校庭を借り，在日2世を中心に第一回が開催された在日コリアンによる民族祭であった。以後，2002年まで20回続く民族イベントが定着していった基盤には，在日コリアンによる民族アイデンティティへの積極的な問いかけと民族文化を求め確認しようとする運動があった。その背景には，1980年代，外国人登録証への指紋認証撤廃運動が，日本社会で民族的な誇りをもって生きる権利を主張するという象徴的な意味をもち，そのことがキリスト教団体や法律家，市民との幅広い共闘運動を生み出し，日本のマスコミと世論の支持を得ていったことなどがあった（飯田2006：53）。

FMサランが開局した1992年末，大阪府に居住する外国籍住民は21.3万人，このうち「韓国・朝鮮籍」は17.7万人（83%）で，東京都の9.4万人を大きく上回っていた。ちなみにその次は兵庫県7.0万人であった（『平成7年版　在留外国人統計』財団法人入管協会，1995年）。中でも生野区は韓国・朝鮮人の最大の集住地だった[3)]。

「インフォメーション提供」で「生野民族文化祭」と並んで挙げられた「生野区民クリスマス」は，生野区内のキリスト教会が教派を超えて連携する「生野地域活動協議会」（1977年設立）が毎年開催する地域イベントだった。この時点で想定されていた「放送発信及び中継局」は3カ所で「KCC，聖和，創愛」とされている。このうち，KCCは在日韓国基督教

会館，聖和は社会福祉法人聖和社会館で，教派は異なるもののともに生野区内のキリスト教系の施設であった（「創愛」はメンバーの一人が生野区内で経営する企業）。

ただし実際に送信が行われたのは，開局と同じ1992年に竣工したばかりの聖公会生野センターの3階6畳間であった。戦前期，大阪で暮らす朝鮮人が設立したガブリエル教会がここにあった。教会は弾圧のため地下活動を余儀なくされ，日本の敗戦後は信徒と牧師が活動を続け，牧師没後も牧師館の建物を家族が守ってきた。1984年に日本と韓国の聖公会の正式交流が始まり，韓国側からの教会再建を求める声を受け，ガブリエル教会と社会福祉法人の保育園が入るセンター建設に至った[4)]。メンバーの回想では，FMは派手なイメージがあったので教会にはふさわしくないという声もあったが，聖公会生野センター主事の呉光現氏が積極的だった[5)]。呉氏も在日2世で，大学時代に本名宣言をし，卒業後は生野地域活動協議会で10年間働いた後，聖公会生野センター（当初はガブリエル地域活動センター）へ移ったばかりだった（聖公会生野センター2022）。「当時聖公会も出来たてで，地域貢献何かしなければという実績がほしかったと思う。で彼の直感で，彼も若かったんでおもしろいと乗り気になった[6)]。」

生野区内の在日による社会活動を支える基盤として，教派を越えるキリスト教系施設の連携，さらにそれに関わる在日二世層の存在が大きかったことが以上からうかがえる。FMサランは，生野に暮らす在日コリアンによる民族・地域・宗教・文化などの活動や運動の歴史的集積がもらしたものという性格を強くもっていた。

2–2　接続される新しいノウハウとスキル

ただしそれだけでは，ミニFMという新しいメディア誕生にはおそらく至らなかった。新しいアイディアとノウハウをもつ在日二世がそこに加わったことで，新しいメディアは姿を現した。

当初から立ち上げに関わっていた洪彦義氏もまた，聖公会系の私立学校に通う経験をもっていた[7)]。大学（聖公会系ではない）を卒業後，地元の広告代理店に入り，印刷物の広告デザインや地元テレビのCM作りをおこなっていた。1989年6月，大阪でFM802が開局した。そこに，ヒット曲のランキングチャートを毎週紹介する番組があった。だがチャートが毎回手作りのため，情報整理と表作成に苦労していた。その際，知人から，コンピュータでチャートを作らないか，という話が寄せられた。洪氏はマッキントッシュのパソコンを使うなど，集計ソフトウェアの扱いに詳しかった。それをきっかけにFM802の看板番組のデータ処理をおこなうようになった。同じ頃，「セントギガ（St. GIGA）」というWOWOWのラジオ局版に相当する衛星放送に関わる仕事が東京であり，同じ知人のつながりで，洪氏も一時それに関わる機会をもった。

そんな経験もあり，洪彦義氏はラジオ放送の実務について一定の知識があり，また放送局

との関係ももっていた。ただそれだけに，「海賊放送」的な受け止められ方をするメディアに関わる活動については，気をつかわざるを得ない面もあった。

> FM802の仕事しているのに，そんなのしていいのと言われたけれど，まあまあ今度のやつはおもちゃやから，メディアとかそんなおおげさなものとはちゃう，許認可もいらないし，ただ地域活動の一環として，身障者支援のこともあるし，コミュニティつくるきっかけになったらいいんちゃうか，ということで（関わった（引用者による加筆））[8]。

在日二世世代は，就職の面でなお厳しい差別に直面していた。しかし，独自のスキルや専門性を獲得することで，壁を乗り越え道を開く経験が積み重ねられていた。ITや通信といった激変する領域は，在日コリアンにとってもとりわけ重要な領域であった。

2-3 「在日外国人放送局のプロローグ」をめざして

FMサランの開局に向けての準備作業のひとつとして，「生野区FM放送開局準備のためのアンケート」が実施された[9]。「生野区FM放送開局準備のためのアンケート（1992年6月12日（金））」と題されたメモには，93人の回答が示されている。それによると，回答者の内訳は，20代32名（女23，男9），30代32名（女20，男12），40代18名（女14，男4），50代以上11名（女8，男3）であった。アンケート配布の方法は不明だが，20代・30代の若い世代が多いこと，また女性が多数を占めていることがわかる。

特徴的なのは，ラジオ聴取の対象として，来日韓国人と在日コリアンの両方が想定されている点である。新しいメディアを構想する際に，在日コリアンにとどまらず，韓国人留学生や当時増加しつつあったニューカマー韓国人の存在が意識されていた点に，グローバル化が意識され始めていた1990年代の新しい状況が反映していた。

そのため放送は日本語と韓国語で行うとされた。「FMサランステーション　韓国語放送班構想　1992．7．15」と題されたメモには，韓国語放送を聴く対象と放送内容が，次のように想定されていた。

> FMサランステーション　韓国語放送班構想　1992．7．15
>
> ◎聴く対象
>
> （1）韓国から結婚して来て住んでいる人
>
> （2）働きに（短期滞在で）来ている人
>
> ◎時間帯及び放送内容
>
> （1）午前9時～11時
>
> 結婚などで居住している人

年齢的にはバラエティーに富んでいる
昼間活動している人が多いだろう
民謡，歌曲等

(2) 午後5時～7時，午後12時～午前2時
働きに来ている人（特に夜の仕事などで滞在している人が多いだろう）を対象にする。出勤前と退勤後
年齢的には20代から30代前半までをターゲットにする。在日や結婚してきた人以上に本国との結び付きが深いので，本国の流行歌を中心にしながら，サザン・オールスターズ，久保田利伸，尾崎豊など（韓国でも結構人気がある）日本の人気グループ，歌手なども考えてよいだろう

(1)(2) に共通して
・時事ニュース　　イベント，法律相談，地域情報など
・一口日本語講座　ことわざ，大阪弁講座
・現代日本社会で話題になっているもの
　例）PKO，選挙，などなど
・在日韓国・朝鮮人を理解するために
　従軍慰安婦問題
　就職差別，名前の問題などなど[10)]

1980年代末から，外国人住民の数が増加し始めていた。背景には，日本のバブル経済による人手不足の深刻化，東西冷戦終結と経済のグローバル化によって後押しされた国際人流の拡大があった。大阪でも短期就労，留学，国際結婚による韓国からの移動者が増加していた。

1992年10月開催の生野民族文化祭でのビラ配布などの宣伝活動を経て，同年12月8日に開局を迎えた。やや遅れて発表された開局趣旨の前半を引用しておこう。

FMサラン・ステーション開局趣旨

現在，在日コリアン社会は世代交代に伴う民族的主体性の変化が急速に進み，価値観も多様化してきています。

区民の30%近くを在日コリアンが占めるここ生野区でも1世から2・3世に在日社会の主役が変わりつつあります。永年，この地域で様々な在日コリアンの活動が行なわれてきましたが，在日社会の多様化にいかに対応すべきかがテーマになってきています。2・3世のライフスタイルの把握いかんによってはこれからの地域活動も影響されると予測されます。今まで関係者の努力で行なわれてきた地域活動に新しいムーブメントと

して FM サラン・ステーションを発足させました。この地域で行なわれている活動情報をはじめ韓国そしてアジアの文化を在日コリアンはもとより日本の人々にも情報発信する FM サラン・ステーションは生野区の町おこしも行ない，新しい国際交流のコミュニティ・エリアにしたいと思っております。現在，限られたエリアしか届かない電波を生野区全域まで届くよう計画をたてています。

この生野区から生まれた FM サラン・ステーションを通してわたしたちのメッセージが遠くアジア諸国まで届く在日外国人放送局のプロローグとして暖かく見つめ育てて下さい[11]。

局長は聖公会生野センター主事の呉光現氏で，在日韓国基督教会館（KCC）幹事の金成元氏，広告制作会社経営の洪彦義氏らが運営委員を務めていた。これら 3 人はいずれも年令 30 代後半から 40 代初め，壮年期を迎え始めていた在日二世であった。

開局趣旨は，在日コリアンの世代交代，それにともなう民族的主体性（アイデンティティ）の変化と多様化への対応の必要性を強調する。「世代」の強調は，一枚岩が前提視されてきた「民族性」に分断をもたらすものとしてときにきびしく批判されてきた。しかし，二世，三世，さらに進む世代の進行，「定住化」という現実を前にして，多様化する民族的主体性のあり方をどのように表現・表出していくか。この点は，新しい世代にとって共通の課題となりつつあった[12]。

生野地域の在日コリアンによる地域活動の中心にいた二世・三世世代が「新しいムーブメント」として始めようとしたのが，FM サランという活動であった。「民団にも総連にも入らない「無党派の在日」に向けてやっていきたい。」筆者が，開局準備を進めていた中心メンバーの一人，洪彦義氏から初めて話を聞いたのは，開局一月前の 1992 年 10 月 30 日，鶴橋においてだった。

もう 1 点，在日コリアンだけでなく日本人住民に向けて，韓国，日本，アジアの情報を発信することで，国際交流のコミュニティ・エリアへと生野を変えていくという方向性が，趣旨では語られていた。日本国内に居住する外国人はもはや韓国・朝鮮籍には限らなかった。1986 年末，日本の在留外国人人口は 86 万 7 千人，うち韓国・朝鮮籍は 67 万 7 千人でまだ 78.2% を占めていた。4 年後の 1990 年末，在留外国人人口は 107 万 5 千人へと増加した。新規の入国増加によって韓国・朝鮮籍は 68.7 千人に微増したものの，比率は 64.0% へと減少した。さらに 4 年後の 1994 年末，合計は 135 万 4 千人へと増加したのに対し，韓国・朝鮮籍の人口 67.6 千人，割合は 50.0% へと急減した。以後，外国人人口に占める韓国・朝鮮籍の人口は半数を割ることとなる（財団法人入管協会『平成 8 年版　在留外国人統計』財団法人入管協会，1996 年）。FM サランの活動は，日本社会における国際化の構図が激変する時期とも重なっていた。

3　ミニFMによって活性化されるネットワーク

3-1　生野から世界までを音でつなぐ

放送は，月曜日から土曜日，夜7時から9時までの生放送でスタートした。全員がボランティアで，日中は仕事や勉強があるための時間設定だった。開局当初のスタッフは在日同胞10人，韓国人留学生5人，日本人2人の17人であった（『東洋経済日報』1992年12月11日）。DJの8割が韓国語・日本語のバイリンガルで，韓国語オンリーの番組も昼・夕方の時間帯に段階的に開設された（『さらん』Vol. 1，1993年3月）。表1は，開局から3ヵ月あまりが過ぎた1993年3・4月の番組タイムテーブルである。

ミニFMリスナーの交流誌として編集された『さらん』創刊号（1993年3月）には，DJを中心としたスタッフの自己紹介が掲載されている。それによると，韓国人留学生のなかには，生野民族文化祭でFMサランの計画を知り在日コリアンのことはほとんど知らないが協力を申し込んだ女性，オモニ（母親）が18年間この地（生野）で暮らした後に帰国したこともあり，その青春時代の話を子どもの頃に耳にした経験をもつ女性などがいた。日本人の中には，日本による移民や植民の歴史に深い関心と問題意識をもつ男性もいれば，テレビ

表1　FMサランタイムテーブル（1993年3・4月）

<table>
<tr><th></th><th>月</th><th>火</th><th>水</th><th>木</th><th>金</th><th>土</th><th>日</th></tr>
<tr><td>9: 00</td><td></td><td rowspan="3">音楽</td><td rowspan="5">音楽</td><td rowspan="3">音楽</td><td rowspan="2">音楽</td><td rowspan="5">音楽</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td>音楽</td><td></td></tr>
<tr><td>11: 00</td><td>関西めぐり
文　敬徳</td><td rowspan="2">韓国演歌＆
トーク
崔　裕景</td><td></td></tr>
<tr><td>12: 30</td><td rowspan="3">音楽</td><td rowspan="3">音楽</td><td></td></tr>
<tr><td>16: 30</td><td>그자리
그노래
徐　允伶</td><td>그자리
그노래
徐　允伶</td><td></td></tr>
<tr><td>18: 00</td><td>音楽</td><td>音楽</td><td></td></tr>
<tr><td>19: 00</td><td>韓国情報</td><td>韓国音楽情報</td><td>生野情報</td><td>ワールドミ
ュージック</td><td>JAZZ＆
ROCK</td><td>世界の民族
音楽</td><td></td></tr>
<tr><td>21: 00</td><td>金　福姫
呉　光現</td><td>高　利文
張　載奉
金　星姫</td><td>洪　佳顕
金　成元
崔　裕景</td><td>文　敬徳
権　浩一</td><td>夫　総司
辻　信一</td><td>河村健一
西中誠一郎
鄭　炳熏</td><td></td></tr>
</table>

毎日（日曜除く）朝9時から夜9時まで放送中。周波数は，78.0 MHZ。76.5 MHZ。
出典：FM. SARANG『사랑さらん』創刊号 vol. 1，1993. 3. 1発行

ニュースでFMサランの存在を知りたまたま見学に訪れたとき，人手不足のために誘いを受けたDJ志望の男性などがいた。

開局から約3か月後の1993年2月2日，開局記念コンサートが東成区民ホールで開催された。約250人が会場に集まった。出演したのは，ガーネット・レイジと東京ビビンパクラブだった。前座には韓国のミュージシャンも出演していた。その中には，日韓共催のサッカーワールドカップ（2002年）の際，韓国側開会式のスタジアムで演奏することになるユン・ドヒョン（1972年生まれ）も含まれていた。「韓流」ブームやK-pop以前の出来事であった[13)]。1992年にアルバム・デビューをしたガーネット・レイジは，西成区出身の在日韓国人ミュージシャン趙博がボーカル担当のロック・バンドだった。趙博は「パギやん」として後に広く知られていく。東京ビビンパクラブは1992年に開催された『日韓演出家会議』に向けて結成された，在日3人，日本人2人の個性的ミュージシャンからなるバンドだった。ボーカルの朴保（パクポー）はソロとしても活躍していた。ただし，FMサランのDJも担当していた権浩一はリスナー向けの冊子のなかで，「このバンドの音に占める韓国的な要素の濃度は，かなり低いと考えるべきだ」と指摘した。むしろ「異種音楽の融合ということが実はふつうに起こってきたことなのだ」（権1993）。

在日の音楽シーンで後に活躍する在日コリアン二世のミュージシャンがいち早く集うところに，FMサランのネットワークの一端が示される。しかしそれ以上に，異種融合がもはや当たり前である音楽の放送を軸に，生野（ローカル），韓国・日本（ナショナル），世界（グローバル）に関する情報の共在を体現しようとした点に，ラジオという選択肢を選んだFMサランの文化的戦略が表出されていた。

始まったばかりの資金のないごく小さなミニFM局にしては，コンサートは大きな規模であった。それが可能になった一因は，国際電信電話会社のKDD（現KDDI）がスポンサーに加わったことにあった[14)]。この時期，日本で増加する外国人住民が出身国へ連絡を取るための国際電話利用が急拡大をしていた。民営化もあって企業間競争が激化するなか，各国際電信電話会社は利用者獲得のため外国人住民へのリーチ手段を求めていた。そのとき活用されたのが，叢生を始めていた各言語のエスニック・メディアであった（町村1994）。実際，当時の同種メディアには国際電電会社の広告が目立つ。KDDがFMサランに関心をもった理由のひとつは，在日コリアン向けだけでなく，韓国からの増加するニューカマーや短期滞在者向けの韓国語放送を行っているという点にあったと推測される。

3-2　大手メディアに取り上げられる「小メディア」

確かにFMサランの開局は，その規模に比してかなり大きな話題となっていた。その開局は，在日コリアン系のメディアはもちろん，日本の大手メディア，韓国メディアで繰り返し紹介された。表2は，判明した範囲の記事等をまとめたものである。この他，テレビニュ

表２　FMサランを取り上げた新聞・雑誌の記事等

在日系メディア（日本語）		
「日本初の在日外国人向け放送局　大阪にFMサラン開局　「在日文化」を紹介」	『東洋経済日報』	1992年12月11日
「生野にFMサラン開局　微弱電波78メガヘルツ同胞2・3世ら生活情報」	『統一日報』	1992年12月11日
「ヨギヌン「FMサラン」　音楽好きの同胞三青年の夢実る　生野にミニ放送局　スタジオは“六畳一間”」	『共同新聞』	1992年12月15日
「生野のFMサランが開局コンサート　外国人も日本人も聞ける電波を　来月から中継局つくり放送拡大　リスナーズクラブも誕生」	『統一日報』	1993年2月15日
韓国系メディア（韓国語）		
「同胞のためのミニラジオ放送局開局　大阪聖公会生野センター内78MHz「FMサランステーション」　最初の同胞放送局　聴取半径100メートル」	『韓国日報日本版』	1992年12月23日
その他メディア		
「ミニFM局に法の壁　電波強過ぎ「待った」　在日韓国人ら運営」	『毎日新聞』（大阪）	1992年12月8日（夕刊）
「出力弱めて開局　在日韓国人らのミニFM局」	『毎日新聞』（大阪）	1992年12月9日（朝刊）
「生野にミニFM局　きょうから本放送開始　在日韓国人青年らの“夢”実った」	『読売新聞』（大阪）	1992年12月8日朝刊
「生野の文化活動拠点に　ミニFM局本放送開始」	『読売新聞』（大阪）	1992年12月9日朝刊
「在日2・3世らがミニFM局　音楽・情報“愛”こめて発信」	『朝日新聞』（大阪）	1992年12月9日朝刊
「韓国同胞に情報を　生野区でFMサラン開局　ボランティアが運営」	『大阪日日新聞』	1992年12月14日
「在日韓国・朝鮮人向けの『FMサラン』大阪に誕生！日本初の「外国人によるミニFM局」，頑張れ！」	『週刊プレイボーイ』	1993年1月1・7合併号（1992年12月22日）
「“日本で初めての外国人によるFM局”「FMサラン」を運営，DJもこなす在日韓国人二世　呉光現さん」	『スポーツニッポン』	1993年1月19日
庄村有治「ミニFM放送局在日外国人で初！　ミニでも自覚は公共放送です！」	『月刊　お好み書き』	1993年2月1日号（35号）
Brian Covert, “New radio station offers music with a message”	Mainichi Daily News	1993年3月15日
「FMサラン・ステーション開局から2ヵ月」（洪彦義）	『インパクション』	79号（1993年3月10日）

注：FMサラン提供の記事資料，他のアーカイブをもとに筆者作成

ースなどでも報道された。

比較の材料を持たないが，ごく小規模なミニ FM 局としては異例の多さと言ってよいだろう。報道の内容も概して好意的であった。「日本初の在日外国人向け放送局」，「日本初の「外国人によるミニ FM 局」」，「“日本で初めての外国人による FM 局”」，ニュアンスはそれぞれ微妙に異なるが，「日本初」の「外国人」による「外国人向け」のミニ FM というのが，大きなニュースバリューと見なされた。

実際の FM サランは，そうした報道内容とはかなりの落差がある，ごく控えめな存在であった。しかし，小さいながらもそこでは，在日コリアン二世・三世を主要な担い手とする地域活動や文化・アートの運動，放送や IT など新しいテクノロジーに明るい起業家，韓国からの留学生や日本人の若者がつながり合っていた。そしてそれらがもう一度，生野というローカルな都市世界に埋め込まれたところから，確かに独自の「化学反応」が生まれていた。

毎日放送されるライブのラジオ放送は，限られた時間内ではあるが濃密なコミットメントの持続を必要としていた。『さらん』創刊号に感想を寄せた DJ などスタッフの文章には，生成するネットワーク，変わっていく自分についての生の印象が綴られていた。

「…FM サランの忘年会があり誘われたので，様子を見にがてらに行ったのがきっかけで，放送中に一度遊びに行き，それ以来スタッフの一員になったのですが，最初は放送局としてうまく行くことよりも皆が一つの共通した目的を持って何かをするという事と，それを通じて人づき合いが広くなれば良いと思っていました。」（DJ 担当，男性）

「いよいよ二回目の放送が終わった。やはり放送は私たちアマチュアにとって難しい事だった。」（DJ 担当，男性）

「何よりも，直接，瞬間的に語りかけられるのがいい。ただ，一方通行なので，その壁をどうクリアするか，それがひとつのネックだと思う。」（DJ 担当，男性）

「…今は…すっかり慣れ，少しは心に余裕さえ生まれマイクに向かうようになった。そして日毎にメンバーが増えていくのもなんとなく気持ちをわくわくさせる事だった。…今は自分が受ける側ではなく与える側に立っているという怖さがあって気が重い時もない訳ではない。しかし，普通の人々の身近にいて手足のような役割をする，そんな放送であってほしい。」（編成，男性）

「…大阪に出て来てはや 10 年。ちゃきちゃきの日本人である僕はこれまで「自分が日本人である事」をあまり意識した事がなかった様に思う。サランにはいろんな国の人がいる。あたりまえの事だけどいろんな顔をした人がいる。…みんな鍋の“具”みたいにいいダシしている。」（担当記載なし，男性）

「外国人に対して日本は冷たいけれど日本は日本だけの国だけでなくて世界の国になってほしいと思います。FM サランはその第一歩で愛を持って開局できたと思います。」

（DJ担当，女性）

「いつも難しい理屈ばかり並べるのではなく，もっと身近なこととして見てもらい，自ら参加して行こうという気持ちになってもらえる番組を創りたいと思う。」（DJ担当，男性）

ラジオの生放送は，限られた時間に作業と気持ちを集中しなければならない。それだけに「怖さ」があった。しかしその分，そこには独特の一体感が生まれた。こうした緊張感は出力電波の微弱な局であっても同じように共有できる体験であった。アマチュアの集まりゆえに困難や失敗もあった。ただしそれは「瞬間的」だった。活字と違い，音は流れていく。余韻は残るが，音そのものは後に残らない。その分，何かを持続的に「創る」ことに向けて，繰り返し前向きになれる場でもあった。とはいえ，ラジオというメディアは，出版など活字メディアとは違い，電波という限られた資源を扱う関係上，日本という国家による管理・監督を強く受ける側面をもっていた。

4　電波をめぐるポリティックス

4-1　小さなミニFMの射程――遙かなる「自由ラジオ」と電波行政

FMサランはいわゆるミニFM局という位置づけであった。無線局を開設する者は電波法の規定により，総務大臣（当時は郵政大臣）の免許を受けなければならない。ただし，「発射する電波が著しく微弱な無線局で総務（当時は郵政）省令で定めるものについては，この限りでない（電波法第4条）」という規程により，微弱無線局の設置が認められている。電波法施行規則（第6条）で定められた「微弱」強度に従うと，FMラジオの周波数帯の場合，きわめて限られた範囲でしか聴取できない。

開局予定の12月8日，午前になって近畿電気通信監理局が「電波が強過ぎて，放送すると違法電波になる」と指摘，口頭で放送中止を指導した。所定の条件で送信した場合，雑音混じりで約100 m以下の距離が聴取可能範囲であるのに対し，FMサランの試験電波について500 mでも受信できるというのが理由であった（『毎日新聞（大阪）』1992年12月8日夕刊）。

同日午後，監理局が出力を改めて測定したところ電波法の規定よりも強い電波が検出された。そのため，送出機の出力を下げアンテナを一部切断するなどの調整を繰り返し，基準内であることを監理局が確認をした。それを受けて，午後7時，予定通り本放送が始まった（『読売新聞（大阪）』1992年12月9日朝刊）。この結果，電波は数十メートルしか届かなかった。「メンバーは「日本の電波法は厳しすぎる」と残念そうだ」と新聞紙面（『毎日新聞（大阪）』1992年12月9日朝刊）は紹介していた。

近畿電気通信監理局による厳格な対応について，FM サランの局長を担当していた呉光現氏は，その後の取材に対し，近畿電気通信監理局が FM サランに来たのは 12 月 6 日付けの『東京新聞』の記事のなかで，「あたかも強い電波を出しているかのニュアンスで書かれたので，郵政省が近畿電監に通報したのでしょう[15)]」と述べていた。電気通信監理局の訪問は予想していたし，「永く放送を続けるうえで越えなければならないハードルだと思っていました（庄村 1993）」と記事で呉氏は述べていた。

行政側の動きの背後については資料がない。しかし，電波行政を監督する国側がこの小さな試みに対してかなり神経質になっていたことは，以上の経緯からうかがうことができる。電波法は当時も現在も，日本国籍を有しない者や外国の法人等への無線局免許・登録を認めていない（実験試験局，アマチュア局等を除く。ただしミニ FM 局はそもそも免許取得の必要がない）。「外国人の放送局」だから介入したのかは不明である。だが，「外国人初」とも評されるミニ FM 局であるがゆえに報道が多くなされ，結果的に行政の介入を招いたことは事実であった。

可聴エリアは生野区東部の一角に限られていた。生野区内に住むメンバーも自宅では聞こえないため，車でスタジオ近くまで移動しカーラジオで聞いたという。このため，近畿圏の有線放送に配信するほか，中継局による再送信の活用により 1993 年 3 月 1 日からは旧猪飼野地域にもエリアが拡大すること（中川 2 丁目に中継局）が告知されていた（『共同新聞』1993 年 2 月 15 日）。

4–2 「在日コリアンの 21 世紀メディア」としての展望

主要メンバーはそれぞれ，宗教関係施設の運営や企業経営などに携わっていた。聴き取り内容や当時の報道などをみても，「海賊放送」のような形で法に大きく触れることについては慎重であった。しかし同時に，在日外国人であるがゆえの法的制約があることについては，当初から強く意識されていた。「FM サラン・ステーション開局趣旨」の後半には，将来に向けての「展望」が用意されていた。以下，引用していこう。

> FM サラン・ステーションの展望
>
> 昨年，12 月 8 日に開局致しました FM サラン・ステーションは在日コリアン社会はもとより日本の社会からも注目されています。
>
> 永年，日本に居住しながら様々な権利が失われていた私たち在日コリアンには外登法，様々な国籍条項など問題が山積みされています。そうした様々な運動のなかで在日コリアンのコミュニケーションメディアの一つとして FM サラン・ステーションが開局しました。日本は先進国に関わらず，在日外国人には表現の自由の分野でも規制しています。特に，電波メディアに関してはアメリカなどと比較して国家統制システムが強化さ

れ欧米諸国からも門戸開放が叫ばれています。サテライト・メディアの出現により電波のボーダーレス時代に入った現在，日本の放送事業も変化せざるをえず，電波の自由化が迫られています。このような状況の下でFMサラン・ステーションの出現が郵政省はじめ日本の行政機関から注視されています。私たちは在日コリアン100万人独自の放送メディアとして生まれたFMサラン・ステーションを在日外国人権利獲得運動の一環として位置付け今後展開させて行きます。そして，電波法の改正と放送権獲得まで，放送を続け，来るニューメディア社会に在日コリアンの21世紀メディアとして成長させる次第です[16)]。

局長の呉光現氏は，FMサランの精神について反ファシズム運動を担ったイタリアの「自由ラジオ」の例をたびたび挙げて説明した。「むろんFMサランが非合法の地下放送局という意味ではない」が，「電波というメディアを用い，自由・文化・平和を守り続ける言論機関でありたい（庄村1993：2)。」このように願いを語っていた。

日本では，すでに1980年代に「ミニFM」局開設のブームが訪れていた。そのルーツのひとつとしてたびたび指摘されるのは，粉川哲夫によるヨーロッパの「自由ラジオ」運動の熱心な紹介であった（粉川1983)。

関西地域でも1980年代後半に個人によるミニFM局の急増が見られ，ピークに当たる1990年頃には少なくとも60以上を数えていた。しかしその後，1993，94年にかけてその数は急減した（和田2011)。それらを調べた和田敬によれば，ここに含まれるミニFMには電波好きの個人が立ち上げたケースが多かった。この点で「自由ラジオ」のような「反マスコミ派」は区別される「遊び派」というべきミニFMがそこでは中心であった[17)]。聴き手の側は電話や手紙でミニFMへ直接アプローチした。その内容が複数の局をつなぐ形（他局の電波の再送信や他局との双方向中継）でそのまま紹介された。聴き手側がそこを表現の場として利用していくことでミニFMの魅力が伝わっていった。こうした連鎖を通じて，ミニFMのネットワーキングが進んでいったという。しかし盛り上がりの臨界点を過ぎると，ネットワーキングは分化・単独化の段階を迎えた。ミニFMに聴取者を引き付ける求心力のかたちは，ネットワーキングすること自体の魅力から特定の局がもつ少数のパーソナリティ性に移行していった。そのため，聴き手側からのアプローチを軸に自らもミニFMを立ち上げるといった連鎖・増殖は減少していった。結果的にミニFMというメディアは一気に衰退へ向かった。和田はこう説明した。

この見方によれば，同じ関西圏にあったミニFMであるFMサランは，ネットワーキング志向の個人（聴き手側）が主導するミニFMが急激な衰退を遂げる局面で登場したことになる。FMサランの場合，熱意をもった送り手側が主導していた。その意味でパーソナリティ性が優越していたと言えるかもしれない。ただし送り手は個人ではなく集団的な放送局

という形をとっていた。このためFMサランの場合，聴き手自身がFMサランを支えるスタッフとなる回路を通じて，聴き手の参加を誘発するという側面があった。スタッフの参加動機をみてもわかるように，こうした傾向を少なくとも初期段階には発見できる。

送り手自体がネットワーキングによって支えられ，それによって，局の展開が支えられていた。ただしFMサランの実際の可聴エリアは生野区のごく一部に限られていた。生野区という分厚い在日ネットワークの資源をもつ場所をインキュベーターとすることでFMサランはスタートを切った。しかし生野を超えて他地域の在日とつながるためには，電波法における国籍条項をはじめ，乗り越えなければならない多くの壁があった。開局から約2年，思いがけず起きた出来事が，FMサランのもつこの両面性とも関わって，事態をさらに大きく動かしていった。

5　阪神淡路大震災との遭遇――飲み込まれるミニFM

5-1　神戸に誕生する新しい外国語ミニFMの「先輩局」として

1995年1月17日早朝，関西地域を巨大地震が襲った。阪神淡路大震災がもたらした被害は，大阪の場合，震源からの距離の割に比較的小さかった。しかしFMサランへは大きな影響を及ぼすことになった。

FMサランが場所を借りる聖公会生野センターは，震災直後から，神戸の中でもとりわけ被害の大きかった長田地域への支援に乗り出した。長田はサンダル産業などに従事する在日コリアンが多い地域という点で，生野とは深いつながりがあった。聖公会生野センターもその活動の一環として，震災直後から関係者が支援物資をもって現地に通うようになった。そうした中，長田にいた在日コリアンの後輩たちから，自分たちもミニFMを作りたいという声を聞いた。そこで，実現できないだろうかということをFMサランで相談した。ただし実現のためには機材をもっていかなければならない。被災で交通が分断されていたので，震災から10日後くらいに原付で送信のための機材をFMサランから運んだ。機材は，新長田駅前近くにあった民団西神戸支部に下ろして，セッティングした[18)]。

1995年1月30日，「FMヨボセヨ」と名づけられたミニFM局（周波数76.5メガヘルツ）が開かれた（『朝日新聞』（1995年1月30日）によれば1月29日）[19)]。「機材は大阪市生野区の地域放送局「FMサラン（愛）」（呉光現局長）から借りた。技術指導も当分の間，サランのスタッフが交代であたる」『朝日新聞』（1995年1月30日）と新聞でも紹介されていた。駆けつけた洪彦義氏によれば，現地で炊き出しをしながら，配給や炊き出しの時間などの情報を放送で伝えた。ニューカマーの移民や一世の住民もいたので，民団の韓国学院の教員に放送を任せ，韓国語と日本語で放送が行われた。洪氏も一週間くらい泊まり込んでセッティングをしてから大阪に戻った。機材がなくなったので，FMサランの方は一時休止状態とな

った。電波は半径500 m ぐらいまで届いたという[20]。その通りだとすると，ミニFMとしては電波法の限度を超える出力であった。

引き続き，長田地域に多く居住していたベトナム系住民への情報提供のため，ベトナム語によるラジオ放送のプランが現地で提案された。関係者による相談を経て，あらたにベトナム語によるラジオ放送局を始めることが決まった。名称は，協力をしているFMサラン（愛）もヒントに「FMユーメン（友愛）」となった。運営に当たるスタッフ5人の研修は，大阪・生野のFMサランで実施された（金治2008：76）。その後，カトリック鷹取教会ボランティア救援基地において「FMユーメン」が4月16日に開局された。この際，ベトナム語に加えて，タガログ語，スペイン語，英語，日本語の番組も提供が始まった。さらに，「FMヨボセヨ」と「FMユーメン」が合併し，新しく「FMわぃわぃ」（両局の頭文字Y（ワイ）を重ねた）が1995年7月17日に発足した。

外国人住民向けの外国語によるミニFMとしてスタートしたFMわぃわぃは，1996年1月に「コミュニティFM」として新たなスタートを切った。コミュニティFMとは，1992年に郵政省がスタートさせたローカルなFM局の制度であった。その後，FMわぃわぃは多文化共生を象徴する存在として全国的に著名になっていく。郵政省による放送政策の面から見ると，利用が伸び悩んでいたコミュニティFM制度を普及させるためのきっかけとして，「FMわぃわぃ」は格好な存在としての面をもっていた。近畿電気通信監理局によるその後の対応は当事者の予想に反して，寛容ないし協力的なものであったという（金地2008：81-84）。

以上のようなストーリーが広く知られていった。その結果FMサランは，こののち，「FMヨボセヨ」・「FMユーメン」の立ち上げに協力し「FMわぃわぃ」成立への道を開いた「外国語ミニFMの先輩局」という形で，語られることが多くなっていった（たとえば『在日コリアン辞典』の記述も同様）。「FMわぃわぃ」は2016年にFM放送を休止し，以降はインターネットラジオに移行した。しかし2024年時点でも，なお活発な活動を継続している。それに比べ，FMサランが単独で語られることはこれまであまりなかった。

5-2　重ねられた外国語FM放送の開局

1995年，放送法施行規則のなかに「外国語による放送を通じて国際交流に資する放送」が加えられ，FMによる外国語放送が制度化された。その第一号として誕生したのが，関西インターメディア（FM COCOLO）だった[21]。阪神淡路大震災から半年後の1995年7月17日に設立され，10月16日に開局された。外国語によるFM放送開始の波が，同じ時期，「上から」押し寄せてきた。1995年11月，大阪ではAPEC（アジア太平洋経済協力会議）の閣僚・首脳会議が開催されることになっていた。

FM COCOLOは関西全域を対象とする広域のFM放送局だった。その周波数は76.5メガ

ヘルツが予定されていた。しかしこのことが，先行するミニ FM 局へと波紋を投げかけていくことになる。先述の「FM ヨボセヨ」が 1995 年 1 月末以降，神戸で使用していた周波数も同じ 76.5 メガヘルツだったからである。このため，FM COCOLO の放送が始まれば，同じ周波数は使用できなくなる。FM COCOLO の開局が明らかになったとき，「FM ヨボセヨ」の関係者は「やりきれない思い」を感じると同時に，放送継続に向けての態勢立て直しに向け，発奮材料になったという（全 1995）。

「FM ヨボセヨ」と「FM ユーメン」を統合した「FM わぃわぃ」の開局日は震災から半年後の 1995 年 7 月 17 日，この日は関西インターメディア（FM COCOLO）の設立日でもあった。そして，FM COCOLO が開局する 10 月 16 日の直前，10 月 14 日に「FM わぃわぃ」はいったん放送を休止し，翌 1996 年の 1 月からコミュニティ FM としての放送を開始した。

周波数の重複はさらに，FM サランとの間でも起きていた。76.5 メガヘルツは，FM サランが開局当初から使用してきた周波数のひとつでもあった。大阪と神戸は距離が遠いので混信の心配はない。しかし，関西全域に電波が到達する FM COCOLO の放送が開始されれば，同じ周波数は使えなくなる。

FM COCOLO が開局した際，FM サランの存在は大手新聞でもなお意識されていた。コメントを求められた洪彦義氏は次のように述べていた。

> ミニ FM ではすでに，定住外国人向けの放送局がある。大阪市生野区では三年前，在日韓国人の二，三世が「FM サラン」をつくった。運営委員会の洪彦義（ホン・オニ）代表は「開局したことは意義がある。問題は言葉ではなくて，本当に知りたいことを伝えられるかどうかだ。国際化はたやすくないし，ファッションで終わってほしくない」と助言する[22)]。

洪氏は，インタビューでの回想で，その不条理さをこう指摘した。「僕ら 76.5 を使っていた。この帯域なら誰も何もないので他に迷惑かけないということで。それを出してきた。だから，僕ら行政からとことん嫌われていたんだなあと。」

> FM COCOLO です。まさに僕らがやろうとしたのが，FM COCOLO だったんです[23)]。

だが，そこには国籍条項の壁があった。それから 3 年後の 1998 年，FM サランは放送を終了した[24)]。

6　おわりに

以上，1990年代に生まれたエスニック・メディアのひとつについて，それをめぐる出来事のつらなり，そしてそこに関わった人の動きと語りを振り返ってきた。冒頭で次のような問いを用意した。1990年代に叢生したエスニック・メディアはその後，どのような道をたどったのか。たったひとつの例であり，この問いに答えることはまだできない。また，FMサランについても明らかにすべきテーマが残されており，引き続き検討を続けたい。しかし，以上の分析からも，現時点でエスニック・メディアを再検討する上で留意すべき点が，いくつか明らかになった。最後に3点ほど述べて，本稿のまとめとしたい。

第一に，在日コリアン二世を主要な担い手とする地域活動や文化・アートの運動，放送やITなど新しいテクノロジーに明るい起業家，韓国からの留学生や日本人の若者がつながり合い，その実践の集積が生野というローカルな都市世界に埋め込まれたところから，FMサランは誕生した。生野区という地域は，分厚い在日ネットワークの資源を結び付け，それを成熟させるインキュベーターとしての役割を果たした。しかしこのことは，見方を変えると，生野が相対的に閉じられた「島宇宙」のような状況にあり，分厚さを増しつつあった在日の諸資源もその範囲内で連携することを迫られていた，という面をもっていた。エスニック・エンクレイヴに近い条件がそこには存在した。ただしその後，在日コリアンは世代の進行とともに地理的に拡散し社会的な多様性を増す一方，生野区には観光目的のコリアタウンが出現するなど，そのエスニックな景観は大きく変化していった。はたして，いまもインキュベーターの役割は存在するのか。そこでメディアはどのような形をとっているのか。

第二に，エスニック・メディアとしてのラジオと言語的マイノリティとの間には，ある種の相性のよさがあった。語りだけでなく音楽もパッケージで流すことのできるラジオは，活字メディアのような集中の「深さ」を求めない代わりに，生活空間のさまざまな場面に浸透していくことができた。労働，通勤，運転，家事などの現場で，エスニック・ラジオは音によって束の間，その場の「空気」をマイノリティにとってよりなじみあるものへと変化させることができた。ミニFMが「自由ラジオ」たりえたのも，コストの低さや技術的簡便さなどと並び，そうしたラジオの特性によって支えられていたと考えられる。だが，移動者も世代の進行とともにホスト社会の言語を習得し，メディアの志向性を変化させていく。在日コリアンもその例外ではなかった。FMサランは，在日コリアン向けの日本語放送だけでなく韓国語放送を組み合わせることで，聴取者の暮らす場が文化的に重層的であることを多様な人びとに気づかせようとしたようにも見える。それらが実際どの程度聴かれていたのか。この点は過大評価できないだろう。しかしインパクトは確かにあった。その後，インターネットやスマートフォンの普及により日常的な情報環境は激変をした。はたして，ラジオが果

たしていた役割をいまになっているのはどのような手段なのか。

第三に，移住者がマイノリティの声をホスト社会に伝えていく方法はどのように確保されているのか。FM サランは自由を求めつつ，しかし法的には「海賊放送」という範疇に収まらないぎりぎりの努力を重ねていた。これに対して，金地宏は，被災地における「海賊放送という〈公共〉」（金地 2008：80）の可能性を指摘した。法もまた相対的な面をもつ経験を通過することで，阪神淡路大震災の後に，それまでは稀であった外国語放送の試みが急に数を増していった。だが，FM サランは，国籍条項を前に，その先の一歩を踏み出せないでいた。メインストリーム・メディアのなかでは十分その声を反映させることのできないマイノリティは，どのような形でその声を響かせることができるのか。インターネットの世界は確かに状況を大きく変えた。だが，課題はなお十分に解決されてはいない。

デジタル化の時代におけるエスニック・メディアの可能性（Yu and Matsaganis 2019）はどこにあるのか。エスニック・メディアの〈公共性〉について，その歴史も含め，引き続き検討をしていくことにしよう。

付記　本稿は，JSPS 科学研究費 22K01921 の助成を受けたものである。

注――――――――

1）放送の名称は，사랑（Sarang）サラン（愛）と表記されていくが，当初のメモでは「サラム」表記であった。呉光現氏（2024 年 8 月 8 日インタビュー）によれば，当初，名称は「サラム（人）」が検討されたが，聞き取りやすさなどの理由で「サラン」となった。

2）執筆者不明「ミニ FM　サラムステーション 815（パリロ）開局準備会　1992. 2. 22　KCC にて」（B4，1 枚）。

3）1980 年代後半の生野区における在日コリアンと日本人それぞれの状況および両者の関係については，谷富夫（2015）所収の「猪飼野の民族関係覚書――一九八〇年代」を参照。FM サランの実際の活動拠点は同じ生野区内でも猪飼野より東側の地域だった。

4）聖公会生野センター（2022）における呉光現氏の発言による。

5）洪彦義氏へのインタビュー，2023 年 9 年 6 日。

6）洪彦義氏へのインタビュー，2023 年 9 月 6 日。

7）以下は，洪彦義氏へのインタビュー，2023 年 9 月 6 日による。

8）洪彦義氏へのインタビュー，2023 年 9 月 6 日。

9）執筆者不明「生野区 FM 放送開局準備のためのアンケート（1992 年 6 月 12 日（金））」（B4・2 枚）。

10）執筆者不明「FM サランステーション　韓国語放送班構想　1992. 7. 15」（B5・1 枚）。

11）FM サラン・ステーションスタッフ一同「FM サラン・ステーション開局趣旨（1993 年 1 月 1 日）」（FM サラン・ステーション 1993：5）。

12）民族的なアイデンティティをどう表現するかは，在日コリアンの主要な言論誌においても共通の課題となってきた。季刊誌『三千里』『青丘』における「アイデンティティ」の変遷につい

て KIM（2007）参照。

13）洪彦義氏へのインタビュー，2023年9月6日。

14）洪彦義氏へのインタビュー，2023年9月6日。

15）庄村有治の個人誌『月刊お好み書き』1993年2月1日号。

16）FMサラン・ステーションスタッフ一同「FMサラン・ステーション開局趣旨（1993年1月1日）」（FMサラン・ステーション1993：5）。

17）飯田（2018：80）は『STUDIO　VOICE』1983年10月号の記述を引用しながらミニFMをこう区別した。

18）洪彦義氏へのインタビュー，2023年9月6日。

19）以下，FMヨボセヨ・FMユーメンの立ち上げからFMわぃわぃ開局に至る過程について，他の資料が注記されている部分を除いて，金治宏『NPO持続の条件』（神戸大学大学院経営学研究科博士学位論文，2008年）による詳細な記述（pp. 72–87）をおもに参考にしている。

20）洪彦義氏へのインタビュー，1995年8月3日および2023年9月6日。

21）外国語FM放送についてのエスニック・メディアという観点からの整理として米倉（2008）参照。

22）「多言語FM「こころ」開局　日本初，関西の105万人向け」『朝日新聞』（大阪），1995年10月24日夕刊。

23）洪彦義氏へのインタビュー，2023年9月6日。

24）呉光現氏へのインタビュー，2024年8月8日。終了の理由のひとつとして，聴取者が少なく反応が限られているため，担い手側の意欲を持続させることがむずかしくなっていったことが指摘された。

文　献

全玟楽 1995「「FMヨボセヨ」その後，そして戦後50年」『世界』614号：101–103。

FMサラン・ステーション 1993『FMサラン・ステーション開局記念コンサートGIG'93』FMサラン・ステーション。

権浩一 1993「ビビンパはウマイ ――音楽界の異種格闘技戦は歴史的必然なり ――」『さらん』Vol. 1（1993年3月1日）。

飯田剛史 2006「在日コリアンと大阪文化――民族祭りの展開」『フォーラム現代社会学』5号：43–56。

飯田豊 2018「ポストメディア」の考古学：ミニFMをめぐる思想と実践を手がかりに」岡本健・松井広志編『ポスト情報メディア論』ナカニシヤ出版。

金治宏 2008『NPO持続の条件』神戸大学大学院経営学研究科博士学位論文。

KIM, Taeyoung 2007「在日コリアンの言論におけるアイデンティティの変遷：季刊誌『三千里』『青丘』にみる70年代から90年代の「在日」」『東洋大学社会学部紀要』45（1）：21–35。

粉川哲夫編 1983『これが「自由ラジオ」だ』晶文社。

国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会編 2010『在日コリアン辞典』明石書店。

町村敬志 1993「越境するメディアと日本社会」『一橋論叢』110巻2号，1993，pp. 255–273。

町村敬志 1994「エスニック・メディアの歴史的変容――国民国家とマイノリティの20世紀」『社

会学評論』44 巻 4 号，1994，pp. 52–66。
町村敬志 1997「エスニック・メディアのジレンマ――ロスアンジェルス日本系メディアを事例に」奥田道大編『都市エスニシティの社会学』ミネルヴァ書房，1997，pp. 123–142。
町村敬志 1999『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社。
聖公会生野センター 2022「30 周年記念連続セミナーアーカイブ【第 3 回】聖公会生野センター活動初期（1992 年）を振り返る」（動画）（2022 年 1 月 28 日），https://www.nskk.org/ikuno/2022/04/01/20210924/，（閲覧 2024 年 7 月 1 日）。
庄村有治 1993「ミニ FM 放送局在日外国人で初！　ミニでも自覚は公共放送です！」『月刊　お好み書き』1993 年 2 月 1 日号（35 号）：1–2。
谷富夫 2015『民族関係の都市社会学――大阪猪飼野のフィールドワーク』ミネルヴァ書房。
和田敬 2011「ミニ FM によるパーソナル・ネットワーキング――関西地域の事例をもとに」『情報通信学会誌』28（4）：17–30。
米倉律 2008「多文化社会における放送の役割に関する調査・研究に向けて」『放送研究と調査』2008 年 11 月号：68–75。
Yu, Sherry S. and Matthew D. Matsaganis, eds. 2019, *Ethnic Media in the Digital Age*, New York: Routledge.
財団法人入管協会 1996『平成 8 年版　在留外国人統計』財団法人入管協会。